

## 「時間は本当にあるのか？」

2014年12月18日(土)  
 会場：Ark Hills Cafe (溜池山王)  
 参加：8名  
 司会・文責：堀越

## 1. 概要：

- ・新規参加者3名を含む総勢8名の少しこじんまりした雰囲気の中で、客観的な時間を念頭に、「時間は人の存在とは関係なく本当にあるのか」を問いとして、対話し考えた。

## 2. 対話：

## (0) テーマについて

- ・提起者から過去小学生時代に思い付き驚いた、以下の考えを説明した：
  - a) もし時間が止まる(=事象A)としても、人の思考・活動も同時に止まるため、私達は気付くことができない。
  - b) 事象Aが起きているかいないかは、a)が正しければ検証できない。
  - c) ひょっとしたらこれまでも事象Aは起きていた可能性がある。起きていたとしたら驚くべきことである。
- ・上記を踏まえ、「時間は人の存在とは関係なく本当にあるのか」という問いを考えたいと提起した。

## (1) 時間を感じられる？

- ・時間を眼で直接見ることはできない。周囲の変化を見ることができるだけである。だから、掴み辛いし考えることが難しい。

## (2) 時間の速度は一定なのか？

- ・進行役から補足説明した。もし(0)項で説明した考えが正しければ、時間の速度自体も常に一定なのかを信用することができない。ひょっとしたら、これまでもこれからも時々客観としての時間の速度は揺らいで、止まることも含め、遅くなったり、速くなったりしている(=事象A)のかもしれない\*1。それを証明することはできない。
- \*1：事象Aは、相対性理論に基づく「観測者の移動速度が観測者自身の体験する時間の速度に影響する」ということとは異なる。
- ・体感として時間は、よく何か物事に熱中しているときは速く進み、逆に退屈しているときは遅く進むということを経験している。

## (3) 人がいる場合といない場合とは？

- ・そもそも人が今体験している時間の進み方というのはどういうものか。人の心拍の速度(約50回/分)の体感から時間を把握しているのではないか。例えば、人の心拍より桁外れに遅い速度の心拍を有する生命体(仮にウルトラマン)なら、人が体験している時間とは全く別の捉え方をしているはずであり、逆に、速い心拍の生命体も逆の意味で同様なのではないか\*2。
- \*2：参考：象の時間とネズミの時間とが全く別物であるという考え。
- ・もしもそうなら、人、あるいは、時間を捉える生命体そのものがないとき、時間はあるのか。ないということもあるのではないか。
- ・仮に生命体がない状態のときは時間がないとしても、その後生命体が戻った状態になったときに過去の生命体がいなかった空白(=失われた時間帯)を生命体の時間軸で測り直してしまうのではないか。

## (4) 歴史的な事実・順序と切れ目なく滑らかな時間

- ・歴史的な事実とその事実の発生した順序は人がいなくてもあるように思える。例えば、イ)雨が降る前に地面は濡れていなかった。ロ)雨が降った。ハ)地面が濡れた。ニ)雨が上がった。ホ)地面が乾いた。こういう複数の事実群と観察された順序(=事象B)は、人がいなくても存在しているように思える。
- ・事象Bがあるということは、そのこと自体からすぐに「切れ目なくて滑らかな時間(=観測C)が存在する」ということを帰着はできない。ひょっとしたら、そういう変化は非常に微小に観察すると、ぶつぶつと切れていて切れ目だらけで、結局微小な歴史的な事実とその発生した順序だけなのではないか。
- ・人のような生命体がいなくても、事象Bは存在するが、観測Cは人やその他の生命体が無意識裡に作り出す幻想ではないか。事象Bを観察した生命体(例；人)が、事象Bを解釈するために脳の中で観測Cという時間を作り出してしまう。そう考えても辻褄は合うように考えることができる。
- ・事象B(断片的な事実)と観測C(滑らかな時間)の差は何で、どこまで微細に見ていくのか。程度の差であるが、雨が降る事例(上記イ)～ホ))では起きないが、もっと微小な量子レベルでは分からない。

## (5) 因果律はどうなるか？

- ・観測Cが事実である(=本当にある)と認めずに切れ目がある事象Bだけでは、因果律が説明できないのではないのか。何かの原因から何らかの結果が発生するという因果律を認めることができるのなら、切れ目のない時間(観測C)の存在(→客観的な時間)を否定できない。
- ・量子レベルで考える切れ目のない時間(観測C)は、因果律を前提としたときに本当に必要なのか。

## 3. まとめ：

- ・普段より少し少ない参加者同士で、少し難易度の高い問いについて、終始静かに対話し、考えた。
- ・少ない参加者数を踏まえて、進行役として初の試みである、対話型のファシリテーションによって対話を進行してみた。